

まえがき

本書は、実用的な英語を習得するためのノウハウを学ぶ本です。大学で14コマ（1学期分）の授業を受けるスタイルで学べるのが特徴です。

本書は、以下の方々のために書かれています。

- ・英語を身につけて、国際的に活躍するビジネスパーソンになりたい学生、社会人の方
- ・英語を使う仕事を自分のキャリアに取り入れたい学生、社会人の方
- ・すでに国際的な業務や英語を使う仕事にたずさわっている社会人の方で、更に英語力を向上させたい方
- ・実用的な英語の学び方を知りたいすべての方

まだ英語であまり会話をしたことがない人たち（入門者）にも、留学あるいは業務などで英語を使ったことがありながら、一層の上達を目指す人たち（初級者、中級者）にも活用していただける内容です。

国際的なビジネスパーソンとして活躍するための英語を学ぶときに、前提として知っておきたいことをはじめ、「聞く」「話す」「読む」「書く」の習得方法、コミュニケーションや文化についての事柄など、幅広いテーマをカバーしていきます。

著者は、1980年代後半から米国の大学へ留学し、卒業後は現地にて就職しました。1990年代後半に帰国後、日本のメーカーに勤務し、欧州市場、アジア市場を担当。その後、コンサルティング団体にて、企業

のグローバル化に関連した業務や国際機関を通じた海外人材の教育にもたずさわってきました。

現在は独立したグローバル人材育成の専門家／経営コンサルタントであり、これまでに25ヶ国100都市以上での業務経験があります。

英語学習本の執筆も長年行っており、英語学習法については、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科において、2008年度より継続して担当している授業の中で扱ってきました。

本書は、これから実用的な英語を学ぶ人たちに親しんでいただけるよう、具体的な事例を満載にしてあります。

そして、第1講～第14講のおわりには、各講の大きなポイントを「本講のPoint」としてまとめました。

また、1人またはグループで演習もできるよう、各講につき2問の演習問題を「Exercise 答えのない演習問題」として用意しました。

加えて、各講のおわりにはコラムもありますから、合わせてご覧ください。

大学で授業を受けているようなイメージで、ぜひ取り組んでいただければと思います。

本書は、学生や社会人の方々が独自に学ぶために読んでいただくことも、大学の授業でそのまま使っていただくこともできます。

第1講～第14講は、著者が講師を務めるなら14コマをこのように進めていくという順序になっていますが、読者の皆さんには、関心のある講から読み進めていただければ結構です。

本書の企画と編集では、慶應義塾大学出版会出版部の奥田詠二さんにたいへんお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

本書が熱心に英語を学習される方々のお役に立つことを願います。

2021年10月
松崎久純

Contents

まえがき	2
------------	---

第 1 講

イントロダクション

—— 英語学習に取り組む

「国際的なビジネスパーソンとして活躍したい人」が、 前提として知っておくべきこと	13
---	----

- 世界の共通語は“Simple English”
- 「日本語お上手ですね」が意味すること
- 誰が英語でビジネスをしているのか
- 「言わなくてもわかる」は通用しない
- できないことを正当化してはいけない
- 簡単かどうかの基準はどこに置くか
- 「学生シャベリ」ではなく、
「ビジネスパーソンとしての言葉遣い」を
- 言葉遣いの適切性を学ぶ

本講のPoint	25
----------------	----

Exercise 答えのない演習問題	26
--------------------------	----

第2講

国際的に活躍するビジネスパーソンに必要な英語力とは

■ 製品の市場を海外に求めるとしたら、 何からはじめればいいのか	29
■ ビジネスを展開していく	31
■ あらたな展開を考えて	32
■ 国際的ビジネスパーソンには、 身につけるべきノウハウやスキルがある	34
■ 商社に頼る形から、 製造企業による自前のオペレーションへ	35
■ 言葉が通じないことが、想像以上の悪影響を及ぼす	37
■ 言葉が通じなくても仕事ができる例外的なケース	38
■ プレイヤーとしてだけでなく、マネジャーとなることも考える	40
本講のPoint	41
Exercise 答えのない演習問題	42

第3講

海外事業にかかわる人たちの英語力

—— 現状と期待されるスキル	45
■ 英語で電話対応をする人たち	46
■ 「よくわからなかったので、適当にやって出しちゃいました」	48
■ スキルを向上させる取り組みがないケース	50
■ 学ばない人たち、学ばない風土	51
■ 海外赴任しているながら、英語がわからないままの人たち	52
■ レベルを引き下げてしまう経験者	54
■ もったいないと思わずにいられないケース	56
■ 期待したいこと、期待されること	58
本講のPoint	59
Exercise 答えのない演習問題	60

第4講

英語でコミュニケーションを取るとは、 ということなのか

■ 受身型の日本人学生	63
■ こんな事態に対処できるか	65
■ どう考えてどう話すか	67
■ 言葉が苦手でもマネジメントできている人	71
■ マネジメントできないだけではなかった	72
■ プリズナーゾーンからの脱出	74
本講のPoint	76
Exercise 答えのない演習問題	77

第5講

成功する「効果的な習得方法」①

—— 聞く、話す	79
■ 話すためには、聞いておくことが必要	79
■ どんなものを聞けばいいのか	81
■ シチュエーション・コメディを選ぶ	83
■ 聞くトレーニングをするときに	85
■ 聞き取りスキルを高めるために	86
■ 歌の歌詞を聞き取ってみる	87
■ 話すことについて	88
■ 聞いたことを話すときに	89
■ 丁寧に話す、簡単なフレーズを用いる	90
本講のPoint	91
Exercise 答えのない演習問題	92

第6講

成功する「効果的な習得方法」②

—— 読む、書く	95
■ 読み書きは、会話よりも難しい	95
■ 何を読んだら、読めるようになるのか	97
■ 興味のある記事、理解しなくてはならない文章	99
■ 興味のある短い記事からはじめ、継続する	101
■ 書くときは例文を写すのが基本	102
■ 「文章を書くスキル」について意識を高める	103
■ 英文ビジネスレターは、その例文を見て書く	104
■ 英語は書かせると実力がわかる	106
本講のPoint	107
Exercise 答えのない演習問題	108

第7講

成功する「効果的な習得方法」③

—— 継続するために知っておきたいこと	111
■ 上達の仕方にはパターンがある	111
■ ラムネ方式で勢いよく栓を開ける	113
■ インテンシブ学習を实践する	116
■ インテンシブ学習の教材を選ぶ	117
■ 友だちを選ぶことの大切さ	119
本講のPoint	120
Exercise 答えのない演習問題	121

第8講

電子辞書や

インターネットの活用について……………125

- 紙の辞書と電子辞書……………125
- できる人ほど辞書をよく引いている……………127
- インターネットで見られる映像について……………128
- 字幕について……………130
- インターネットで読む、文章を探す……………131
- インターネットでの学習で留意したいこと……………132

本講のPoint……………133

Exercise 答えのない演習問題……………134

第9講

どんなフレーズから

マスターしていけばいいのか

—— 覚えるべき「簡単なフレーズ」とは……………137

- 覚えるべき会話フレーズの特徴……………137
- 正確に話せるだろうか……………139
- きっと「知っておいてよかった」と思うフレーズ……………141
- きっと頻繁に使う表現……………142
- 道を尋ねる／道案内をする……………145

本講のPoint……………146

Exercise 答えのない演習問題……………147

第 10 講

留学先／赴任先で待っている事柄 ①

—— 文化、風習の違いを感じることに……	149
■ 「あれっ」と思うことばかりが続く……	149
■ 説明が理解できないので、余計に「あれっ」と思う……	151
■ こちらの期待と違うことが連続する……	152
■ 日本人ばかりのところで、 いかに日本語を避けて生活するか……	155
■ いい加減としか思えない仕事ぶり……	156
■ 「これで怒らないのはおかしいのでは」と思える例……	159
■ 悲しくなる出来事……	161
本講のPoint……	162
Exercise 答えのない演習問題……	163

第 11 講

留学先／赴任先で待っている事柄 ②

—— 不信感により溝ができる典型的なパターン……	167
■ 信頼関係が築けない……	167
■ 留学生のこんな行為に苦しめられる……	169
■ 不審にしか思えないことが続く……	172
■ こんな事態が起こるのは、はじめて……	174
■ トラブルはこんな展開に……	176
■ そのまた先の展開……	177
■ 揉め事が起きた場合の注意点……	179
本講のPoint……	180
Exercise 答えのない演習問題……	181

第 12 講

恥ずかしい思い、気まずい思いをせずに、 上達することはない…………… 183

- はじめは誰でも困ることがある…………… 183
 - 伝えたくても伝えられない…………… 185
 - 人に迷惑をかけていた…………… 186
 - あの表情は、そういう意味だったのか…………… 188
 - わかっていなくて、申し訳ありません…………… 189
 - 取り返しがつかなくなった…………… 191
 - 黙っているのが情けなくなる…………… 193
 - 当たり前のことを当たり前に話したい…………… 194
 - 感情が揺れる体験…………… 195
 - 若いときに学ぶメリットとは…………… 197
- 本講のPoint…………… 199
- Exercise 答えのない演習問題…………… 200

第 13 講

アウトプットの機会を見つける…………… 203

- これまでにアウトプットの機会はあったか…………… 204
 - 機会を見つけるためにしてみたいこと…………… 205
 - きっかけを掴むためにトライする…………… 206
 - 何かを通じて学ぶ…………… 208
 - 英語を使う仕事を望んでいれば、それが叶うことは多い…………… 209
- 本講のPoint…………… 211
- Exercise 答えのない演習問題…………… 212

第14講

丁寧な言葉遣いを身につける	215
■ まずは返事の仕方から	216
■ 言葉遣いを知らない学生	217
■ 「きちんと話す」とは、どういうことか	219
■ もう少し例を見てみよう	221
■ 道を尋ねる／道案内での丁寧な話し方	222
■ ……してもよろしいでしょうか	223
■ お礼／お詫びを丁寧な言葉で	224
本講のPoint	225
Exercise 答えのない演習問題	226

Column

「どのくらいかかりますか」というフレーズ	27
「どうやって行くのですか」というフレーズ	43
ちょっとした会話フレーズで練習を	61
きちんと区別して使えるようになる so と too / until と by	78
「楽しみにしている」「楽しみで待てない」というフレーズ	93
It depends. (時と場合によります)	109
挨拶を交わすときに	122
自分の名前を伝えるときに	135
「しまった。一言フォローを入れたい」と思ったときのフレーズ	148
断るときのフレーズ	164
上達のためには“Describe”してみる	182
会話フレーズは棒読みせず、感情を込めて	201
フレーズを覚えるまでは、間違いや勘違いだらけ	213
「慎重に使いたいフレーズ」—— 相手が思わぬ反応をしていた	227

Epilogue

— あとがきにかえて…………… 229

■ 「やる気」の測り方…………… 230

■ 止めることはできなくなった…………… 233

■ ナンバーワンになる
—— 英語をマスターして、頭角を現すためには…………… 236

参考文献…………… 240

イントロダクション

—— 英語学習に取り組む
「国際的なビジネスパーソンとして活躍したい人」が、
前提として知っておくべきこと

ここでは具体的な内容に入る前に、学習から成果を導き出し、仕事でも活用できるようになるために、前もって知っておきたい事柄をカバーしていきます。よく理解して、意識を高く持つことで、英語学習を実りあるものにしていきましょう。

全 14 講のはじめの講になります。本講では、国際的に活躍したいビジネスパーソンを目指す人たちがマスターすべき英語の特徴や、学習をするときに気をつけたい点などについてお話していきます。

難しい話が出てくるわけではありませんが、どれも英語を身につけるにあたって、知っておくと有利になる事柄ばかりです。

逆に、これらについて考えたことがないと、せっかく学習を積み重ねても、費やした労力に見合う成果が見出しにくくなってしまいます。

よく考えながら、じっくりと見ていきましょう。

■ 世界の共通語は “Simple English”

まず、英語には2種類のものがあることを意識しておきましょう。それらは「ネイティブスピーカーの英語」と「世界の共通語としての Simple English (シンプル・イングリッシュ)」です。

この2種類のうち、私たちが学ぶのはシンプル・イングリッシュの^{【★】}

ほうです。

ネイティブスピーカーの英語は、英語圏で育った人たちや、(個人差はありますが) 高校2年生くらいまでに英語圏で生活をはじめるとして英語を身につけた人たちの使う英語です。ネイティブスピーカーの英語は、イギリス語やアメリカ語などとも呼ぶことができるでしょう。

これに対してシンプル・イングリッシュというのは、英語のノンネイティブスピーカー〔英語を母語(ネイティブランゲージ)としない人たち〕が、英語のネイティブスピーカーや、自分とは異なる言語を母語とする英語のノンネイティブスピーカーとコミュニケーションを取るために使う、世界の共通語としての英語です。

シンプル・イングリッシュは、その名の通り、イギリス語やアメリカ語と比べるとシンプルでやさしい英語になります。

インターネットで、たとえば Wikipedia (インターネット上の百科事典) のページを見てください。そこに日本語で「ジョー・バイデン」と打ち込んで検索してみましょう。

日本語でページが現れますが、そこで言語を選択できるセクションを見てみます。米国の大統領のことですから、実に多くの言語によるページがあります。

その言語欄に、English とは別に Simple English があるはずですから探してみましょう。English と Simple English の両方のページを見て、比較してみてください。

English はイギリス語でありアメリカ語ですから、それに慣れていない人には難解なはずですが、それに対して Simple English のほうは、比較的やさしく書かれていると感じるのではないのでしょうか。

- [★] ここで言う「私たち」とは、目安として高校を卒業する1年くらい前から、あるいは高校を卒業してから、はじめて本格的に英語のスキルを身につけようとする人たちのことです。著者は長年の考察から、ネイティブスピーカーの英語は、遅くとも高校2年生くらいまでに、英語圏で生活するなどして、実際に使っていないと身につかないと判断しており、それ以降に開始した学習や実践で身につけることができるのは、ほとんどの場合シンプル・イングリッシュのほうだけと考えています。



Wikipediaで「他言語版」の項目をクリックすると“Simple English”の項が現れる

Wikipediaで検索できるすべてのキーワードに Simple English のページがあるわけではないようですが、世界的に有名な人名や固有名詞などでは見つけることができますから、他にもいろいろと試していただきたいと思います。

私たちは Wikipedia の English のページは読みこなせなかったとしても、Simple English のほうは読めるようになりたいのです。なぜかというと、国際的に活躍する私たちに求められるのはシンプル・イングリッシュであり、実際に習得できるのもシンプル・イングリッシュのほうだからです。

ここで間違って English のほうにこだわると、必要以上に難しいものを習得しようとしていることになり、英語学習がとてつもなく難しいものになってしまいます。English のほうを習得して使いこなすのはもともと困難で、途中で嫌になっても不思議ではありませんから注意が必要です。

私たちは、聞くことも、話すことも、読むことも、書くことも、シンプル・イングリッシュであればできるという状態になりたいのです。

どこまでがシンプル・イングリッシュで、どこからがネイティブスピーカーのそれなのか、現在は判断がつかないと思いますが、それは学習を続けると感覚的にわかってくるようになるものです。

■「日本語お上手ですね」が意味すること

次の例を紹介しておきましょう。

著者の私は日本語のネイティブスピーカーで、私の話す日本語は、外国人で日本語のわかる人たちの話す「共通語としての日本語」とは違うものです。

東南アジア人の知り合い数人と料理屋さんへ行った時のことです。温泉旅館の中にある和食のお店で、座敷の部屋に通してもらいました。知人たちは日本に何年か住んでいて、日本語だけでも行動のできる人たちで、お店の従業員の人たちからも日本語が上手だと感心されていました。

すると、私の隣にいた従業員が、私に「お客さんは日本の方ですよね」と問い掛けてきました。「ええ、そうですよ」と答えると、「やっぱりそうですよね。話し方が日本人ですものね」と言うのです。

つまり、従業員の人たちは私の知人たちの日本語を褒めてはいますが、日本人の話す「ネイティブスピーカーの日本語」としてではなく、共通語としての「シンプル・ジャパニーズ」として聞き、その上で上手だと言っているわけです。

シンプル・ジャパニーズは、日本語のネイティブスピーカーにも通じる日本語で、十分にコミュニケーションを取れるのですが、「ネイティブ・スピーカーの日本語」とは違います。それは日本語のネイティブスピーカーである私が「奥の席へどうぞ」と促されたときに言う「ああ、私、手前のほうで結構ですので」とか、「(そちらで)よろしいのですか」と聞かれて言う「ええ、私が注文まとめたほうが、たぶんいいですから」といった話し方とは違う、ある意味で教科書通りの日本語なのです。

話し方のトーンや間まも含めて、日本語に熟練した人たちには、日本語

のネイティブスピーカーが話す日本語とシンプル・ジャパニーズの違いは、聞けば（あるいは読む場合でも）すぐにわかるものです。

現在シンプル・ジャパニーズを話している人で、高校3年生より年齢が上の人たちは、書くほうもシンプル・ジャパニーズになります。これはシンプルな日本語しか書けないことがよくないという意味では決してありません。

彼らがこれからいくら日本語を書く練習をしても、日本語のネイティブスピーカーで文章の上手な人たちが書くようには、まず書けるようにならないことは想像できると思います。したがって彼らにとっては、むしろシンプル・ジャパニーズをしっかりと書けることが大事で、それが彼らの学ぶべきことなのです。

この例からわかる通り、私たちも英語のネイティブスピーカーが上手く書くようには、残念ながら、なれるものではありません。その代わりにシンプル・イングリッシュを使ってビジネスもできるよう、書くスキルを身につけることが大切です。

シンプル・ジャパニーズを話す人たちが、和食のお店の従業員に「上手ですね。感心しますよ」と言われるように、シンプル・イングリッシュを書く私たちも、英語のネイティブスピーカーや、あるいはネイティブでなくとも熟練した人たちから「上手に書けていますね。十分に理解できますよ」と言われるスキルを身につければ、それがネイティブの持つスキルとは異なっても構わないのです。いずれにしても私たちの英語スキルは、そこに落ち着くものでもあるのです。

■ 誰が英語でビジネスをしているのか

「ネイティブスピーカーの英語」と「世界の共通語としての Simple English (シンプル・イングリッシュ)」の話をしてきましたが、英語のネイティブスピーカーは、世界中にどのくらいいるのでしょうか。

これを企業の人たちが集まる研修で考えてもらうと、多く出てくるの

は「4億人くらい」という答えです。アメリカ、イギリス、オーストラリアなどと英語圏の国々の人口を足して、それらの国々に住みながら他の言語が母語であろう人たちの数を差し引くと、かなり大まかな計算になりますが、このくらいが英語のネイティブスピーカーの人数だと思えます。

もちろん英語圏以外の国々にも、子供の頃から母語と同じように英語を話したり書いたりしてきた人たちが数多くいるはずですが、そうした人たちの人口を加算したとしても、その総数は、世界人口に比べてかなり少なく見えます。

つまりノンネイティブスピーカーとして、すなわち世界の共通語として英語を使う人の数は、ネイティブスピーカーとして英語を使う人たちの数よりも相当に多いようです。

そこで以下の3つのパターン(a~c)を比較してみましょう。このうちのどれが多く、どれが少ないと思いますか。

- a. 英語のネイティブスピーカー同士が英語で行うビジネス
- b. 英語のネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカー（世界の共通語として英語を使う人たち）が英語で行うビジネス
- c. ノンネイティブスピーカー（世界の共通語として英語を使う人たち）同士が英語で行うビジネス

ネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーの人口の割合から考えると、bとcは、aよりも多いことが想像できるのではないのでしょうか。

このように見てみると、世界中の実に多くの人たちが英語を使ってビジネスをしており、英語のネイティブスピーカーにとっても、ノンネイティブスピーカーにとっても、英語でビジネスをする相手が英語のネイティブスピーカーでないのは、ごく普通のことであるのがわかります。

そうなると、英語ができないために世界中で行われているビジネスに参加できないことがあるとすれば、それは実にもったいないことに思えるのではないのでしょうか。

「自分は英語わかりませんので……」と言うことすらも、国際的な事

業にたずさわる会社になれば、決して褒められたことでないのがわかるはずです。

■「言わなくてもわかる」は通用しない

言葉が通じないとどのように困るのか。それは実際に体験すればわかることですが、自分が困るだけでなく、そのために周りに迷惑をかけてしまったり、問題を引き起こしてしまうこともあります。

問題というのは、たとえば業務で海外へ赴任した人が、現地の従業員とのコミュニケーションが上手く取れず、現地法人をマネジメントできなくなってしまうことなども含みます。

よくあるのが、赴任者が英語も現地語もわからないのに、態度は高圧的で、現地従業員との関係がわるくなり、ひどい場合には現地従業員の退職が連続するようなことです。

著者はベルギーで物流拠点の立ち上げにたずさわったことがあり、その際にはしばらく現地に滞在していました。立ち上げたばかりの倉庫に、あるとき2人の作業者が、他の同じ日系の会社から転職してきました。

彼らが一緒に会社を変えたのは偶然ではないようでした。彼らによれば、以前の会社では、日本人赴任者たちの横柄な言動に耐えられなくなった何人もの作業者がほぼ一斉に退職したとのことで、そのうちの2人が自分たちだということです。

その会社には日本人赴任者が2人いたそうなのですが、2人とも英語も現地語もまともに話すことができず、命令口調の英語か日本語で怒鳴るだけで、作業者たちは仕事の仕方がわるいといつも非難されていたとのことでした。

彼らは、日本人赴任者の語学力が足りず、コミュニケーションを取れないのが原因で上手くいっていないのに、自分たちの能力が低いと言われるのが本当に嫌だったと話していました。

私自身はこうした赴任者と現地従業員の間トラブルを聞くのは、は

じめてではありませんでした。欧州で白人を相手にとというのは、あまり聞いたことがありませんでしたが、日本人が威張っているアジアなどでは、残念ながらよく見聞きする話だったからです。

この話を聞くと、問題は言葉が通じないことだけではなく、赴任者たちが多少なりとも英語を話すことができ、コミュニケーションを取ることができれば、これほど関係が悪化することはなかったのではないかと思えます。

日本人赴任者が「仕事はそんなに詳細まで説明しなくても、相手も専門家だからわかるはず」と考えていたりすると、現地従業員に期待しているようには動いてもらえず、お互いに理解できないことが増えていきます。

仕事は、お互いに精通した言語で、よく話し合ったつもりでも理解し合えないことが多いもので、「言わなくてもわかる」というような考え方は成り立つものではないのです。

■ できないことを正当化してはいけない

私などが驚いてしまうのが、こうした話になると「そんなことを言っても、自分たちは英語がわからないのだから」と、あたかも現地従業員たちとコミュニケーションを取る責任を放棄するようなことを言う人がいることです。

英語なり現地語を覚えようとせず、意思疎通できないことを正当化するような風潮は、実は多くの日本企業の中にあります。たとえば海外営業をする部門では、皆が語学習得の必要性を認識し、学習に熱心でも、生産を担当する部門では、外国語なんてやる気もないといった形で存在するわけです。

そうした人たちは、「現地で日本語のわかる人を雇えばいい」とか「必要なときに誰かに通訳してもらえばいい」と安易に考えていて、コミュニケーションを取ることは自分の仕事ではないという捉え方をしています。それで、自分たちは英語など覚えなくてよいとなってしまっ

いるわけです。

こうした風潮があるところでは、外国語を身につけて外国人と意思疎通できることの価値を意図的に下げようとする発言も聞くことがあります。「言葉だけわかっているでも仕方がない」とか、「英語屋にやらせておけばいい」といったことを言う人はいるものです。

このように人の努力や成果など、何かの価値を下げようとする行いをインバリデーション (invalidation) と言います。彼らはインバリデート (invalidate) して、外国語がわかることや学んでいることを価値の低いこと、または価値のないことのように見せて、自分ができないことや、取り組まないことを問題ではないように見せようとしています。

すなわち自分ができないことを正当化するために、できる人をインバリデートするわけです。

こんな風潮が蔓延してしまえば、そこからよいものは生まれてきにくいものです。前向きに学ぶ人たちは、インバリデートなどするのは愚かなことで、それが全体のレベルを下げってしまうことも知っています。

ぜひこのような行為はなくなってくれることを願っています。

■ 簡単かどうかの基準はどこに置くか

ここからは、英語を身につける学習をするときに気をつけたいことを見ていきます。

まずは英文や英会話センテンスを見たときに、何を基準に「簡単かどうか」を判断しているか。これについて考えてみましょう。

社会人を対象とした研修などで、入門者や初級者向けの英会話教材を見せて、「これは簡単だと思いますか」と聞くと、多くの人が簡単だと答えます。しかし、続けて「これを見ないで同じことを話せますか」と尋ねると、これに対しては「はい」という反応が少ないのです。

どうやら、読んで理解できれば簡単と考える人が多いようで、それが話せるかどうか、特に「見なくても話せるかどうか」については、あま